

心理学との出会いと宗教心理学

東洋大学 名誉教授

恩田 彰 (おんだ あきら)

私は1942年に東京高等学校に入学し、それまでインド哲学か宗教学をやろうと思っていたが、小保内虎夫先生から初めて心理学の講義を受けたことで心理学が人間の基本的な学問であることを知り、心理学、特に宗教心理学を将来研究したいと思うようになった。それは後に禅の心理学的研究において実現した。

日本心理学会では東洋大学学長・佐久間鼎先生を班長とする文部省総合研究「禅の医学的・心理学的研究」が1961年、1962年に発表された。私はその総合研究で東大病院の精神科医・平井富雄博士と共に幹事を務め、禅と創造性との関係について研究してきた。平井先生は、佐久間先生がその著書『黙照体験の科学』（1938年）、『神秘的体験の科学』（1948年）で黙照体験すなわち禅定体験を脳波で測定するとアルファ波が出現することを理論的に予見しているのを見て、禅定の脳波を記録しようと思いついたという。坐禅時の脳波的研究を含むポリグラフの研究が平井先生の博士論文となり、この研究が日本にとどまらず世界的に知られるようになった。これが禅の科学的研究の基盤になり、これらの研究が世界的に広まり、実証的研究が広く行われるようになったのである。

また日本応用心理学会においても、1971年の大会で「東西サイコセラピーの見方と展開」というシンポジウムが開催された。佐藤幸治先生が企画されたが、直前に逝去され、松村康平先生が代わりに司会をされた。佐藤先生は臨済宗の禅の立場から曹洞宗の禅の研究手法や研究態度について要旨で批判されていたが、それに対して秋重義治先生は曹洞宗の禅の立場であり、厳しく反論された。そのやり取りは、斯界の両権威が激しく討論されているようで大変興味深く、すごく感動的であった。

研究者の中には、「宗教はいかがわしくて科学の対象になりにくく、気をつけて扱わなければならない」という人がいる。一般的に日本人はなぜ宗教を避けたがるのか。それは人間にとって、また自分にとって宗教は最も重要なものであることに無意識的に気づいているからこそ、避けようとするのだと思う。言い方を変えると「事実を知るのは恐ろしいのではないか」ということである。最近では若い人たちが宗教心理学研究会を立ち上げ、日本心理学会でも毎年、宗教心理学の問題を論じている。近いうちに日本宗教心理学会の設立も計画されているが、その動向に期待したい。



Profile — 恩田 彰

1948年、東京大学文学部卒業。文学博士（東洋大学）。日本創造学会名誉会長、日本心理学会終身会員、日本応用心理学会名誉会員、日本心理臨床学会名誉会員。専門は教育心理学。著書は『創造性の研究』、『創造心理学』、『創造性開発の研究』、『禅と創造性』、『仏教の心理と創造性』（いずれも恒星社厚生閣）、『東洋の知恵と心理学』（編著、大日本図書）、『心理療法とスピリチュアルな癒し』（分担執筆、春秋社）など。